

棚尾地区まちづくり事業

平成25年9月25日（水）19時～

棚尾公民館3階

第27回 棚尾の歴史を語る会 次第

進行（小笠原幸雄）

1 前回までのテーマに関する参考意見など

永坂奎兵衛、料理、大正～昭和初期の棚尾の活況など

2 テーマ 「チャラボコ」

(1) 説明（磯貝国雄）

(2) 出席者による補足説明、感想など

3 連絡事項・情報交換など

ものづくりセンター2階 道具展 11月30日まで

棚尾村の村長印、国勢調査印などが展示されている

4 次回日程

第28回10月23日（水）午後7時から

「棚尾の消防」「名倉半太郎所蔵俳句短冊集」

第29回11月27日（水）午後7時から

「堀川の沿革」「平和用水」

テーマ48 「チャラボコ」

1 要旨

チャラボコは、太鼓・笛を奏でながら町内を練り歩く、祭礼には無くてはならない花形である。囃子（はやし）車の前部に小締め2組、後部に太鼓1台を設置し、周囲を造花や提灯で飾る。西三河の矢作川流域で行われているが、曲は地区ごとで異なり、長年伝承されたものを受け継いでいる。呼び方も「チャラボコ」「囃子」など地区により様々で、棚尾でも古い記録では「囃子」或は「打ち囃子」と称していた。

演じる人は、昔は若い衆であったが、昭和48年（1973）からは、子ども会が主体となった。現在は棚尾地区伝統芸能保存会も組織され、若い後継者も育ち、子ども会と一体で運営している。

囃子車は2台あり、1台は、昭和63年に現在の町内会制度へ移行したとき、町内会長が中心となって奉納されたものである。もう1台は、平成21年に一部助成金を受け、地区の費用で新築した。

今年も間もなく、ふれあい館で元気な子ども達の稽古が始まる。皆さんもお祭でチャラボコの音が聞こえたら、是非近くへ行って応援して下さい。

2 矢作川流域のチャラボコ

出典：「定本矢作川」 ㈱郷土出版社 2003年3月23日

囃子（打ち囃子、チャラボコ、ちりから）

矢作川流域に祭礼時に、太鼓・笛などの楽器を囃し、簡単な屋台車とともに村内を練り歩く「囃子」は多く存在した。

名称としては、「囃子」と呼んでいた地域が最も多い。「ちりから」という呼び名は、六ツ美地区で用いられていた。太鼓の音をそのまま呼び名とした。「チャンチャンチャラボコ」という地域（岡崎北部）もあった。又、これから派生した呼び名として、「チャンチャンチャラのドンドン」「チャンチャンバラバラ」「チャラボコ」などがあった。この他に「本囃子」「屋台囃子」「底抜け囃子」「打ち込み」など、様々な呼び方がされていた。高浜地区では「チャラボコ」、足助地区では「打ち囃子」と呼ばれる。

囃子車の前部に小太鼓を設置し、後部に大太鼓を吊るすという形式が一般的である。囃子車には周囲に造花を取り付けて飾ったり、提灯を付けたりした。足助では、「花車」と呼ばれ、藤の蔓や、樹木と造花できれいに飾った。楽器としては、大太鼓・小太鼓・横笛が

基本的なものであった。演じる人は圧倒的に若い衆が多かった。

3 昔の祭り

- (1) 「里まつり」 出典：碧南文化68号 昭和38年10月 高木二九

常日頃、何くれと無く世話をしてくれる爺さんがありました。四角い赤ら顔で、大禿げのきんか頭でした。けいこ獅子と仇名されていました。祭りが近くなってきましたと、神楽は勿論囃しの毎夜賑やかに催されますが、これと時を同じうして獅子舞の稽古が始ります。其のとき被るかしらがこの爺さんそっくりのものだったからです。

昔、棚尾の祭りは旧9月の20、21日でした。その時、各字からはめいめい囃しを出しましたが、その賑やかな事は耳もどうかなってしまいそうでした。この先頭をきって獅子舞は行くのです。ところどころ目指す家の前にて一舞いしては祝儀をいただきました。

私の覚えている時分にはもうそういうことはありませんでした。村が東西南北に区分され、北部を除き他の3部がお神輿を主体として仕組まれ、「ぼんでん」を先頭に平太鼓二組を新入りの若衆の背に寄せ、太鼓方がチャンチャンチャボコ、チャンチャンとやけに敲き立て皮の破れるのを自慢しました。

それですから皮屋はいつも替皮と張り替える道具を持ってついて歩きました。その後へお神輿。これには白木の重いのがあり、3組の内の先を切って行きます。次は金ぴか、その後は少々禿げたお神輿でした。これに太鼓をつけて打ちその辺りに数人の笛方が居りました。それ等の後ろには羽織袴の兄い株が提灯を持って十数人続きます。これが21日には早めに出て、提灯ではなく笹竹を持って行きます。これは奉納相撲の立見の人々を座らす為でした。村のお祭りが来ますと、新入りは裕を、古参は羽織袴を新調しました。

- (2) 紀元二千六百年奉祝行事に関する綴り

「打囃子挙行届」 棚尾町長

紀元二千六百年奉祝棚尾町郷社八柱神社祭礼ニ付左記要領ニ依リ挙行致度候条此段及御届候也

記

一、 挙行の日時

昭和15年11月10日 午前8時ヨリ午後4時迄

〃 11日 〃

一、 挙行ノ打囃子屋台通路

別紙ノ通り

一、 挙行ノ打囃子屋台構造

打囃子屋台仕様書

- (1) 極メテ瀟洒簡略ノ組立式ニヨル長サ7尺、巾4尺、高サ6尺5寸ノ
木造屋台ニ木製小型3個ノ車輪ヲ付シタルモノニシテ手引運転ヲナス
後部1個ノ車輪ハ握手ヲ取り付ケ方向転換ニ便ナラシム。
此ノ全重量25貫、操車所要人員5人内外トス。
- (2) 組立用材ハ全部檜材ヲ用フ
屋台骨子ノ仕組取付装置ヲ為ス丁字型ノ主要部分ニ3寸角ヲ 他ノ骨子ハ2寸
5分角以下ノモノヲ用フ
- (3) 屋台ハ油引き紙障子4枚ヲ以テナス
装飾トシテ軒ノ周囲ニ巾1尺位ノ幕ヲ張ル又屋台前面ニハ紙造花(長サ2尺位)
十数本ト角行燈ヲ又左右背ノ3面 軒下ニハ手丸提灯数個ヲ吊下グ
- (4) 囃子用太鼓ハ小2大1計3個ヲ屋台ニ結び付此ノ寸法小直径1尺5寸胴ノ長
サ2尺
- (5) 此ノ囃子は前記3個ノ太鼓ヲ打ツモノノ他ニ笛吹き2～3人ニテ合奏囃子ヲ
ナス
- (6) 囃子手・操車手ノ交代者共30人内外ヲ以テ1組トス
- (7) 当町ハ東・西・南・北ノ4部ニ分レ、各部ニ1台ズツ有シ4台ニテ神社ニ討
込ミヲナス

以上

4 子ども会によるチャラボコの復活

昭和49年 神社記録

囃子は昭和48年大祭に初めて子ども達に呼びかけたるに25名の応募者にて1台にてお祭参加して大変喜ばれたので、本年更に募集したるに、50名の応募が有りし為1台増して49年度より囃子連2台という賑やかな祭礼となって、氏子の皆様に喜んでいただけたる由。これから毎年2台出すことにする。

5 チャラボコ屋台の奉納

(1) 昭和63年の車

ア 中部新報 昭和63年10月18日号

「地元の区民が手造り」「チャラボコ屋台を奉納 棚尾地区」

碧南市棚尾地区、八柱神社の秋の祭礼は、快晴に恵まれた15日(宵祭り)16日(本祭り)の日程で行われた。自粛ムードの中、(花火打ち上げ・歌謡ショー・厄

年のパレードなど中止) チャラボコ、餅投げは例年どおりで境内はゴツタがえし、訪れた区民らは祭り気分を味わった。

特に今年は嬉しいことがあり、祭りに花を添えた。同地区町内会長会(斎藤照彦幹事長ら10人)と48年からの正副幹事長・同氏子総代経験者・一部有志の寄付でチャラボコ屋台が奉納されたのである。

棚尾地区では、2台あるチャラボコ屋台が古くなってきたのと、今年度市行政区域再編で、今まで16の町内会が、10になったそのスタートの年ということを記念して、地区町内会長会らが新しく1台をと、関係者だけで約200万円の寄附を集め、奉納した。

屋台はヒノキ造りで、高さ2.5メートル、幅は2メートル、横3メートルの立派なもの。古い屋台は60年ほど前のもので、図面もないことから、棚尾地区の大工・指物師・溶接を家業としている職人たちが協力、約2ヶ月かけて完成させたという。

地元の人による手造りの屋台は、古いのをまねたが、台車は使い易く改良して、小太鼓の上げ下げを調節できるように改良と工夫をこらし、大太鼓1・小太鼓2を取り付けた。

宵祭りの15日午前11時から、八柱神社に関係者が集って奉納式があり、斎藤幹事長から、氏子総代の代表永坂勇さんに目録が贈られた。

(子どもはやし連は95人)

碧南市内の伝統芸能で、チャラボコ・チャラボコと小気味よいリズムを奏でる屋台の演奏は、22の地区に伝わっているが、各地区とも後継者の育成に熱心で、いまでは、子供達が進んで練習に励んでいる。

棚尾地区では、子ども会(140人)を中心に笛・太鼓の指導をしている。現在は、はやし連95人、神楽は45人で、小・中学生が参加し、いい音色を聞かせてくれる。子供達は区民館で、地元の平岩秀美さん(59)、平岩健治さん(58)のベテラン兄弟に教わったが、正月明けには寒げいこに入ることになっている。

本祭りでは、新しい奉納チャラボコ屋台を繰り出し、八柱神社周辺約8百メートル程を演奏し、区民に見事な笛・太鼓のバチさばきを披露して拍手を浴びた。

イ 棚尾公民館だより昭和64年1月1日号

「チャラボコ奉納」

今年は新町名組織の1年目の事業として、地区の大勢の方々のご協力により、八柱神社へチャラボコを奉納しました。

チャラボコは、戦前・戦後は東西南北の各部で、1台ずつを青年団が担当して、

それぞれ地言（じごと）＝節で祭りを盛り立ててきました。昭和40年頃全廃になりましたが、47年に子ども会の山本幸一さん・棚小の平岩秀美先生と弟の健治さん等3人の非常な努力により復活、今日まで守られてきました。

近頃は郷土芸能が見直されて脚光を浴び、各種の行事に出演の要請がきたりして、益々関心が高まってきております。これを機に誇りある伝統を、何時までも伝えると共に、嘗ての東西南北のように各部1台ずつ、それぞれ受け継がれた地言で、これからの祭礼を一層盛り上げる日も夢ではないと思います。

ウ 奉納者の御芳名

（町内会長会） 斎藤照彦 平岩励治 井上柳男 榊原長七 榊原鋼一 小笠原忠雄

杉浦芳一 石川武 小笠原和三郎 杉浦慈勇

（氏子総代） 永坂勇 石川共平 永坂由一 永井千秋

（篤志者） 平岩慶一 石川清一 榊原武夫 石川鉦平 石川秀雄 小澤重利

永井治策 加藤光平 長崎源司 黒田亀治郎 永坂亀久雄 榊原武

小笠原規吉 井上太一 榊原八十治 長田利生 杉浦実一

斎藤安幸 永坂丞平 栗津良一 池田義男 成瀬武夫 斎藤良二

井上理一郎 藤井浅次郎 梶川浩 古久根勇蔵 平岩安治

杉浦信之 榊原利男 長崎房雄 外山秋太郎 古久根徹 吉田貞一

名倉修 竹田一男 杉浦喜八 斎藤孝一 杉浦一平 永坂里嗣

生田旭 池田利雄 杉浦三平 榊原金一 斎藤太志 杉浦徳三郎

（製作者） 喜八建築 石川溶接所 指徳建具店

昭和63年10月吉日

(2) 平成21年の車

ア 中日新聞 平成21年10月17日号

「23年ぶりに屋台車新調 碧南・棚尾地区」

碧南市棚尾地区の祭りで引き回す屋台車が23年ぶりに新調され、笛や太鼓のおはやし「チャラボコ」を演奏しながら町内を練った。

老朽化に伴い、区にある二台のうち一台を345万円かけて新しく造った。うち250万円はコミュニティー助成金として財団法人自治総合センターから受けた。

大太鼓一張り、小太鼓二張りを搭載。花飾りやちょうちんが付いている。17日も若者らが笛とともにチャラボコを奏で、祭りを盛り上げる。



6 地言（じごと）

棚尾地区囃子連（チャラボコ）の楽譜である地言は次のとおりである。

- 一 百ウ百ウ 百百百イ 百リガトロ 百百百ノ百
百ウト百 ト百イ百ロイ 百リガトロ トイ百百ウロ百
百リガトロ ト百イ百ロイ 百リガトロ トイ百百ウロ百
百ウ百ウ ト百リコ 百百百ノ百 百ウ百ウ ト百リコ 百百百ノ百
- 二 百ウ百ウ 百百百イ 百リガトロ 百百百ノ百
チロ百 百百ウロ 百リガト百ウ百
ト百イ 百リガトロ ト百ウ百
百ウ百ウ ト百リコ 百百百ノ百 百ウ百ウ ト百リコ 百百百ノ百
- 三 百百百イ 百リガトロ 百百百イ 百リガトロ 百百百イ 百ノ百
チ百ロ リ百ロ ロイ 百リガトロ ウ百ラ百ラ
百リガトロ 百リガトロ百 百百ウロ ウ百ライ 百リガトロ
百百百イ 百ロ百 百百百イ 百ロ百
ウ百ライ 百リガトロ ウ百ラウ百
- 四 百百百イ 百リガトロ 百百百イ 百リガトロ 百百百イ 百イ百イ
百百百イ 百リガトロ ウ百ラ百ラ
百リガトロ 百リガトロ百 百百ウロ ウ百ウロウ
百百ウロ ウ百ライ 百リガトロ 百百百イ 百ロ百 百百百イ 百ロ百
ウ百ライ 百リガトロ ウ百ラウ百
- 五 トン百ララウ トン百ララウ ト百イ百ロ 百ンライ
リ百リ百 百ウトロ 百リ百ラ リ百リ百 百ラ百ラ
トイ百ロ 百ンライ チ百ロ 百リガトロ 百ノ百
百百ウロ ウ百ライ 百リガトロ 百百百イ 百ロ百 百百百イ 百ロ百
ト百イ 百リガトロ ト百ウ百 百ウ百ウ ト百リコ 百百百ノ百
- 六 百百百イ 百リガトロ 百百百イ 百リガトロ 百百百イ 百ノ百
チ百ロ リ百ロ ロイ 百リガトロ
四面 海もて 囲まれし 我が 敷島の 秋津島
外なる 敵を 防ぐには 陸に 砲台 海に船
百百ウロ ウ百ライ 百リガトロ 百百百イ 百ロ百 百百百イ 百ロ百
ウ百ライ 百リガトロ ウ百ラウ百

7 平成25年の日程・巡行路

祭礼 10月19日・20日

稽古 10月1日(火)～17日(木)まで 月曜日は休み 場所：ふれあい館



8 中山のチャラボコ

(1) 経緯

明治初年頃、中山の住民生田仙次郎、石川源之助、その他2、3名合わせて数名の人が、旧明治村根崎へ出かけて覚えてくる。当時、近隣の町村でチャラボコが流行り始めていた頃である。

生田団次郎は現、山田自転車店より養子に行かれた方で小締を習ってこられた。生田仙次郎は生田源一の親で太鼓を習ってこられた。石川源之助は笛を習ってこられた。囃子の車・器具一式揃えるに当って村よりの資金は充分でなく、前記の方々の寄附に負う所が大きかった。

その後、青年団が囃子、神楽の運営を担当する。第二次大戦中は若者が軍隊にとられて、人手不足になり一時中断する。戦後、再び青年団が主体となって復帰する。中山は棚尾町の部落の一部であったので、棚尾町の祭礼日には出かけて行った。東西南北と4台の車が出されて、中山は北部であった。替わりに中山の祭礼日には東西南の内の1台がきてくれた。棚尾の囃子はテンポが遅く、ゆっくりした曲の流れだったが、中山の囃子はチャラボコ本来のリズムで手の動きが早く棚尾のチャラボコとは対照的に際立った存在だった。

中山も昭和三十年代都市化が進み青年団が解散した時、囃子・神楽は中断された。昭和45年有志により再興される。メンバーは中年以上だったので、将来への伝承を託して、昭和49年より小中学生に教えるようになった。近年、中山は市の中心地に位置する関係上、市の行事に出演の依頼があり、出かけて披露する。平成元年囃子会員は杉浦民治、石川又穂、石川嗣彦、高橋祐治、生田紀男の5名である。

(2) 中山の曲目

7曲有り、次のとおりである。

- | | | |
|---|--------|------------------------|
| 一 | ひやかし | 各民家の前でひやかしを行う |
| 二 | よう | 村人の注文が有ると行う |
| 三 | だい | 〃 |
| 四 | しんし | 〃 |
| 五 | チイチイトン | 〃 |
| 六 | シヤギリ | スピードのある最高の曲である 神明社本殿の前 |
| 七 | 宮下がり | ゆっくりした曲で本殿より下がる時行う |

9 思い出話など

ア 昔は、獅子舞の後について、屋台車ではなく、人の背中に小締めを付け、他の人が叩いたということは先輩から聞いている。

イ 昭和20年代は門付けが行われていたが、嫌だった。

ウ 現在でも、大鳥居前の階段は子どもでは上げることが出来ないので、大人が担い棒等を使い手伝っている。

エ 市内のチャラボコについて

平成6年11月3日の記事

チャラボコを保存し、伝承し、後継者の育成に努めることを目的に「碧南チャラボコ保存会」が6つの地区で発足した。霞浦、久沓、千福、西端、二本木、東松江